

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

C3キューブ 伝える物達

### 【作者名】

アロンダイト

### 【あらすじ】

超国家分離主義者マカロフの引き起こした戦争が終結した世の中  
今までもろくな使い方をされずに人々に呪われ人としての自我を持つにいたった禍具《ワース》と呼ばれる道具をめぐる話

1996年 冬

ウクライナ プリビチャ チェルノブイリ

「これが、噂の物か・・・」

超過激派テロリストのイムラン・ザカエフがそれ《・・・》を見ながら言った

「ああ、取扱いには気をつけるよ。このお姫様はだいぶ気まぐれだからな」

相手の売人はそう言いながら部下と共にザカエフの渡した武器を見てる

「この中に武器を入れるのか？」

「そうだな。もともと入ってたのはもう抜かれてるから中身は空っぽだ」

「そうか・・・」

Mi 24ハインドが飛んでいき風圧が辺りを揺らす

「でだ、くそつたれなイカレ野郎どもか盗んできてやったんだ、少しおまけてくれ」

売人がにやにやしなう言ってきた

「ふざけるなよ。こいつと、武器を交換する約束だ。値下げはしない」

「頼むぜ、これからも 家族会 と殺りあつのは俺らなんだから、仲よくしていいや」

「ふざけるな！代金は最初と同じ！変更は無しだ！」

ザカエフが怒鳴ったその時

ダアアン！

ザカエフの左手が肩の根本から吹き飛び血飛沫が広がった

「スナイパー！」

その一声で部下や売人が慌てふためき走り回る中ザカエフは何とか残った右手で地面を這いずり一台の車に乗り込む

「ザカエフ、大丈夫ですか？」

部下のマカロフが聞いてくるが答える余裕もない

その後別の部下がそれ《・・・》を回収、したと聞いて一安心した

しかし、その時それ《・・・》にザカエフの血が付着していたのを彼らはまだ知らなかった

「また親父か・・・」

少年、夜知春亮《やち はるあき》は自宅の玄関で溜息をついた

春亮少年の前には縦横1mはありそうな一つの黒い立方体が置かれてる

世界中を旅する父親が時折ゲリラ的に送りつけてくる様々な物品、これも宅配業者がヒイコラ言いながら運んできたものだ

「うっ、正しい順序を踏まないと開かないのかな・・・？」

うんうん唸りながら表面をなぞったりしてみる

時たま女の子の声が聞こえたりするが幻聴と断定

「よし、放置しようっ！」

さわらぬ神に祟りなし、さっそくもちあげる

「超重てえ！なにが入ってるんだ!？」

ふらふらといつもの物置に箱を放り込む

「はぁ・・・腰が痛いや・・・」

慣れない重労働で痛くなった腰をさすりながら春亮はちょっと休もうとソファーに横になった

ところ変わって夜知家の離れ

「あ、このはちゃん、晩飯ですか？お腹すきました・・・」

「あら、ゾリシヨさん。こんばんわ、肉じゃがを作りすぎたので春亮くんにおすそ分けに・・・」

夜知家の離れに住む村雨このはが同じく離れに住む少女ゾリシヨ・ユアンと話す

本人がチャームポイントといってる頭頂部から飛び出た一本のヘア毛が元気なさそうに垂れてる

「肉じゃが、ですか・・・楽しみです」

二人はおしゃべりをしながら春亮の住む母屋に向かう

母屋に近づくと

「おい、春亮！もう少なにか無いのか？」

「食つ早えよー」

家主の春亮と言い合つ知らない女子の声にこのはの歩みが止まる

「・・・なんだろね、あの声？」

「強行突入です！」

若干怒ってるような感じのこのはを先頭にゾリシヨが続く

「こんばんは、春亮くん」

先ほどの怒りを微塵も感じさせない話し方だった

「このはか。それにゾリシヨも、丁度いい二人に話といつかなんとい

「うか……」

「春亮！お腹すいたぞー！」

出てきてのは春亮よりも背が低い銀髪の少女

「……えーっと、春亮くん？とりあえず、警察行こうか？」  
ゾリシヨが笑顔で呟く

「いや、誤解だ！そんなんじゃないから！」

「春亮くん、この子は？」

大人の対応をするこのはに

「初対面で子供扱いとはな、幸の薄い顔しておるくせに」

「幸薄ッ……！」

いきなりの幸薄発言にこのはの怒りに火がつく

「え、ええと……このは、その鍋はなんだ？」

危険を察知した春亮が話題を変える

「肉じゃがだって」

春亮の問いにゾリシヨが横から答える

「そ、そうか！じゃあ、夕飯まだなら久しぶりに食べてけよ！ゾリシヨも一緒にどうぞだ！」

「そ、それなら……お言葉に甘えて……」

「ゴチになりまーす」

なんとか場の空気を転換した春亮だった

「そうですか。崩夏《ほなつ》さんから・・・ですか」  
フィアと名乗った銀髪の少女を含めた四人でちやぶ台を囲み肉8  
じゃが2の肉じゃがを食べながら春亮は今までの経緯を話した

「崩夏の旦那が送ってきたならまず呪われてるね《・・・・・・・・》。私  
たちと同じくらい」

「お主らも呪われてるようだな」  
僅かな沈黙の後

「・・・ええ、あなたの先輩のようなものです」  
代表としてこのはが答える

「人化できるほどの呪いを受けたのか・・・貴様らはなんだ？なにかの  
武器か？」

「あなたは？と聞いたら答えますか？」  
そこでフィアとこのはがにらみ合いしばらくしてフィアとがふと  
言った

「崩夏はここに来れば呪いが解けると言ったが・・・本当か？」  
「そこは安心していいよ。前例もいるし、このはちゃんもアルバイト  
とかいっぱいしてだいぶ解けてるもんね」

ゾリシヨが肉じゃがを食べながら話す

禍具《ワース》は人々の負の思念が集まって呪われたため反対に正の思念を浴びれば呪いは中和するのだ

「それに、ここは代々清浄な地脈が集まる場所だからここにいるだけで呪いは中和されるんだよ」

春亮の言葉にフィアは安心したような顔をした

「まあ、気長に頑張ってねー」

ゾリシヨがお茶を啜りながら呟く

「ときに春亮くん。フィアさんは今夜どこに泊まるんですか？」

「離れは空いてないから、母屋のどこかに泊まらせようかと・・・」

「え？」

「このはが氷ついでる

そこへフィアが

「そつだ！さっき私の体をあんなに弄り倒したのだ！最上級の寢所を用意しろ！さもないと呪うぞー！」

「いや待てー！おまえさっきはただのはκ・・・」

だが春亮の反論を湯呑みが倒れる音がささぎる

発生源は・・・このはだ

「ふ、不潔ですううっっ！！」

とこののははそのまま駆けていった

「・・・警察、いっつか？」



「だから違つてー!」

翌日 昼休み

春亮は両親がいないため昼ご飯は自炊している

そして毎日クラスメイトとおかずの食べ比べをするのが日課で今日も例外ではない

「夜知、今日こそ勝たせてもらおうぞー!」

成績優秀で律儀に校則を守るザ・委員長を体現したような真面目な女の子上野霧霞《うえの きりか》がお弁当箱を広げた

「おおっ!霧霞ちゃん今日は自信ありげだね!」

お弁当勝負の審判を務める実那麻渦奈《みやま かな》がすでに箸を握りしめながら話す

「今日はよりによりをかけたからな。絶対に負けん!」

「なぜ毎日毎日そんな気合を・・・」

「なるほど・・・霧霞ちゃんそんなに夜知を振り向かせたいか・・・乙女だぜ!というわけでございます」

もう一人の友人兼中学からの腐れ縁の伯途泰造《はくと たいぞう》が霧霞の卵焼きに箸を伸ばす

「な、なにを言ってるんだ!まったく、ばかげてる!」

霧霞は顔を赤くしながら渦奈と泰造が卵焼きを食べるのを眺める

そのうち二人がひそひそと審議し始め

「うーん・・・今日の勝負は、卵焼きにアボカドを挟む斬新さを見せた春亮の勝利!」

春晃に軍配が上がった

「くっ!そうか斬新さ!私は新たな味の探求をせずについつい保守的になりがちだったとは・・・」

そこで一回頭を垂れ

「男に料理で負けては女が廃る!次こそは勝つ!」

こうして昼休みは過ぎて行った

放課後 下駄箱でこのはと一緒になった

「委員会はどうしたんだ?」

「休んじやいました、なんとなく」

とぞうに

「ヒヤッハー!テメエら!帰る準備はいいか!?春亮くん一緒に帰ろう!」

「その世紀末な話し方はなんとかならんのか?」

「いやー、なんだか胸騒ぎがしてね!フィアちゃんが心配だから早く帰ろう!」

ゾリシヨが和気藹々と話しながら春亮に飛びついた

そう、春亮もこのはもなんだと言って家に置いてきたファイアが心配なのだ

速足で家の門をくぐり扉を開ける

「なんじゃーりゃー!!?」

家はめちゃくちゃだった

ひっくりかえったテーブルに倒れた戸棚そして極め付けは縁側に突っ伏すファイアだった

「おいファイア！なにがあっただ!?」

「春亮くん！洗面所も大変なこと!」

「泡まみれだったねもしや、これは・・・」

「まじでなにがあっただ!?ファイア起きろ!」  
春亮がファイアを起こす

「は、春亮・・・大変だ・・・」

「なにがあっただよ！ファイア!」

「じ、実は・・・」

「黄緑色で二本足の宇宙人が乗り込んできて！」

「うー..」

フィアの言葉を遮り春亮のチョップがフィアに直撃した

「掃除、ね...」

ゾリシヨが洗濯機から溢れた泡を掃除しながら呟く

居間の惨状とこの状態を見てひらめいた

「なんだか懐かしいな...」

自分もここに来たときは一般常識が欠如していて春亮くんにはたくさん迷惑をかけた

(彼女は私と同じで焦ってる。強大な呪いを一刻も早く解きたいあまりいいことをしようとしてからぶりしてるのだ)

「...このはちゃんなら気づくだろうし、大丈夫か」

「おい、起きてるか？」

「うるさい、寝とるわ」

「起きてんじゃねーか」

「うるさい呪うぞ」

「そうか・・・まあその・・・悪かったな、お前は人みたいだけど人じゃないんだよな。忘れてたよ。このはやゾリシヨも最初は変なことばっかしてたからな」

「あのウシチチと一緒にするな」

「へいへい、まあ用はだ。呪いを解くのは時間がかかるから焦らずじっくりでいいから。わかんないことがあったら俺にわかる範囲で教えてやるから」

「・・・・・・・・・・フン」

「飯は台所に置いとくから勝手に食べな、あと俺たちからのプレゼントだ、とつとけ」

春亮は去り際にこのはとゾリシヨの二人からの衣服のおさがりを置いて行った

数分後フィアは部屋から手をだし袋をひったくる

中には衣服が何着とメモが入っていた

『お子様には下だけで充分ですよ』

「死ねっ！」

ストリートに自分の気持ちを手紙にぶつける

『ブラが欲しければ自分でアルバイトでもして買いなさい。もっとも、私たちは成長しないから無駄だと思いま』

そこまで読んだフィアは手紙を床に叩き付ける

次に出てきたのはなんだかモコモコした服、もといパジャマ

『寝間着はゆったりしたものがいいからこれを着て寝るといいよ』

おそらくゾリシヨとかいうあのロシア人だろう

「……まあ、感謝しよう」

そして次に出てきたのは立方体のおもちゃ、ルービックキューブとおせんべい

「ぬ。ゴマ入りか……実に香ばしい……」

日本の茶菓子が痛く気に入ったようだ

さらに翌日

ゾリシヨがあげたパジャマをかなり気に入ったようで上機嫌のフィアは台風が近づいて荒れている海が移ってるテレビにくぎ付けだ

「これが海か・・・」

「テレビの使い方はわかったか？」

「バカにするな、このボタンでチャンネルとやらが変わるのだろ！」

フィアはおっかなびっくりでチャンネルを変える

「じゃあ、俺たちは学校行くから、暇はテレビでつぶせよ」

「わかっておるわ、さっさと行ってしまえ」

今度のフィアは『ワンニャンパラダイス地獄』というよくわからないテレビ番組をみてる

「おはよう、春亮くん！」

ゾリシヨがこのはと玄関で待っていた

「じゃあフィア、家事とかはおいおい教えてくから今日はなにもするな」

「ぬぬ・・・そうか・・・」

昨日の失敗を思い出したのか苦い顔をするフィア

「じゃあフィアさん、私と春亮くんは楽しい楽しい学校に行ってきたから」

「このはさーん、あっしは？」

ゾリシヨが手を振るが黙殺される

「な、なんだその嫌味な言い方は！」

やはり出会いが悪かったのか二人の仲は悪い



「どうせウシチチのことだ！その巨大なチチをチチらしく使って二人仲よく乳繰り合うのだろう！なんとハレンチな！さっさと行ってしまえー」

「なんか不安だけど・・・時間も時間だし、行ってくるからな」

「あほ・・・ほんとに置いてかんでもよかるう・・・」

「見られてる気がしますね」

国際空港前が出た一台のタクシーの中、長いタクシードライバーの経験からしてこのお客はとびつきり変だ

「あ・・・その、すみません」

「おや？貴方もでしたか」

禁煙のタクシーの中で堂々と煙草をくゆらせる金髪の女性は流暢な日本語とともに金属音《・・・》と共に肩をすくめた

「日本語お上手ですね。日本へは観光ですか？」

「いえ、仕事です」

「それはごく苦勞様です。どのような仕事か、聞いてもよろしいですか？」

そうきくとその女性はニヤリと凶暴そうな笑みを浮かべた

啜えた煙草がみるみる灰になり濃密な紫煙が言葉と一緒に吐き出される

「ゴミ掃除です」

「退屈だよね、その退屈はどうやって紛らわすのかな？」

ゾリシヨが屋上に寝ころびながら呟く

自分も来たばかりの頃は家で一人退屈だったから顔を隠してこっそり春亮についていったからその気持ちは解る

双眼鏡の先では銀髪の少女が男子生徒となにやら話してる光景が写ってる

「まあ、いいか・・・」

手にした双眼鏡を仕舞った

「ふふふ、来てやったぞ！春亮！」

銀髪の少女、フィアが教室の入り口で仁王立ちしていた

「フィア!?なんでここに!?」

「学校に来るなどは言わなかったから来た！」

「当たり前すぎて言わなかったんだよー！」

ワーワー言い合ってる

「キヤー！ヤバい！かわいい！なにこの子!?春亮くんの友達!?」  
渦奈がフィアに頬ずりする

「春亮め！このこの！このはさんに飽き足らず、こんなかわいい子までー！」

泰造も羨ましそうに春亮に絡んでくる

「ふむ……個人のことにはあまり詮索しない主義だが、学級院長としていくつか確認させてもらおうか？」

何とも言い難いオーラとともに霧霞が春亮に詰め寄る

「と、とりあえず……泰造、悪いけど席作っておいて……」

「この場においてはまずいと判断しフィアを教室の外に引っ張る

「うわっ！なにをする、呪っぞ……」

「あ、春ああああっ……」

購買部の帰りのこののがフィアを見て叫んだ

「何で来たんですか!？」

「やっぱり暇だからな、それにこの女だけ学校に来て私はダメというのは不公平だ！それにさっきの受け答えは完ぺきではないか……」

「見てる！っちは冷や汗モンだったよ……とにかく、日本に来たばっかていうキャラを崩すなよ！、ていつかお前、その制服どうした？」

「ウシチチかゾリシヨの部屋から借りた。しかしなんだあの部屋は？  
箆笥の上に何とも言い難い下着が」

「私の部屋じゃないですか！あれはちょっとした気の迷いというかなんていつか……とにかくくどくどやって入ったんですか!？」

「窓を一枚ほどぱりーんと」

「割ったんですか!？」

「さすがフィアちゃん、私ができないことをわびれもせずやる。そこに痺れる懂れるううー!!!」

「お前はいつも急に出てくるな、ゾリシヨ!」

窓から入ってきた《……………》ゾリシヨにツッコむ

「さっき霧霞ちゃんが日村先生に頼み込んでねフィアちゃんの授業見学を取り付けたんだって!」

どこからだしたのか「勝訴」と書かれた紙を掲げる

「マジか……………」

「その通りだ」

後ろからやってきた霧霞が春亮をにらみつける

「この君達がいるとはいえ年頃の女子といるのだ、なにか間違いがあるかどうか聞き出すから覚悟しろよ……………」

授業見学ではなく確実にこっちがメインだろう

「よくわからんが、授業に出てよいのか? キリカ、おまえいいやつだな」  
「!」

そんときのフィアはとてもうれしそうだった

都内のホテルに陣取った彼女は煙草を吸いつつ荷物を確認する

金髪の美女はタクシーから降りた後ホテルに入り本国から届けら

れた道具のチェックをする

「……これは？」

覚えのないギターケースの蓋を開け顔を引きつらせる

「余計なお世話を……最悪《ビッチ》！」

中に入っていたカードを握り潰しケースを投げ捨てる

豪華な赤いドレスが荒い呼吸と共に上下する

「ああ……ビッチ……」

苛立ちを抑えるために取り出した煙草を吸う。一本、二本、三本と三分程で吸いきる

そのとき荷物に中の携帯が鳴り響き電話をとる

『本作戦の後方支援員《オーグジラリ》の初期連絡』

「そうですね、ご苦労様……ところで、荷物の中に一個、余分な物があつたんですが、それはあなたの仕業？」

『……何のことかわからない？』

「知らないならよろしいですわ。では後方支援員よ、さっそく始めましょう」

『了解、支援を開始する』

「ここはよいところだな・・・」

フィアが屋上にもたれかかりながら憂鬱そうに呟く

「ねえ、そろそろ帰ろうよー」

「ゾリシヨに賛成だ。早く帰ってメシにしよっ」

もう下校時間も近く部活の生徒もほとんどいなくなってる

「もう少し・・・もう少しだけ・・・ここにいたいのだ」

悲しそうに呟いたフィアをみて春亮は

「十分だけだぞ」

そっぴいとゾリシヨは空腹が限界らしく先に帰ってしまった

「こんな人もいないし、何も無い場所が楽しいか？」

「光景や風景ではない、学校というものは今まで縁がなくてな・・・こんなに大勢の人間が楽しそうにしている場所は初めてだ」

「そっか・・・」

哀愁漂うフィアの背中を眺めていると

「春亮。お前は知りたいか？私が今までどこにいて、今まで何をしていたどんなものか」

「それは・・・」

春亮が一瞬視線を巡視し答えを告げようとしたら

「第一の問いにお答えしましょう。それ《…》は数百年もの間廃城の隠し倉庫に隠れてたので我々の目を逃れていたのです」

豪華な赤いドレスを風にはためかせた金髪の美女がそこに現れた

高価そうな赤いドレスにウェーブのかかった金髪に紅をさした口には煙草が啜えられた美女

しかし、その彼女の両腕は肩から指先まで真っ黒い鉄で覆われていた

まるで巨大ロボットの腕のようで自身の体よりも巨大な鉄の手甲とでもいふべきかその光景はまさにいびつなヤジロベイのようだ

「あ、あなたは…いったい？」

警察呼ばれても文句言えない不自然さに若干怯えながらも春亮が聞く

「おや、これは失礼を。わたくし【蒐集戦線騎士領】にという組織に所属いたしますピーヴィー・バロライと申します。以後お見知りおきを」

巨大な鉄の手でドレスの端をつまみ一礼。ひどくシユールな光景だ

「えーっと、よくわからないのですが…」

「おや、ご存じありませんか。失礼ですが、貴方は夜知性の方ですか？」

「そうですね…」



「では、説明いたします。蒐集戦線騎士領と貴方の父系にあたる夜知崩夏は我等と対立しており、貴方の後ろにいるそれ《・・・》を破壊するのが目的です」

「あなた・・・何でフィアを狙うんだよ！」

「なぜ？愚問です。それは禍具に関わる組織全ての関心ですがわたくしたちの組織は【研究室長国】とも【竜島《ドラコ》ノ竜頭組織《ドラコニアンズ》】とも【ビブオーリオ家族会《ファミリーズ》】とも当然【夜知崩夏】とも違います。我ら蒐集戦線騎士領は、禍具の存在を赦さない《・・・》！禍具はこの世に存在するべきではない存在！ゆえにわたくしは、筆頭たる箱型の恐禍《フィア・イン・キューブ》を破壊いたします！」

するとピーヴィーは唐突に春亮達に駆け寄る

「逃げる、春亮！」「春亮くん！」

フィアとこののが同時に叫ぶが

チーン！チーン！チーン！

「チッ！」

ピーヴィーの手甲で火花が二回散った

「おやおや、まだ腐れ糞《ビッチ》がいましたか」

「酷い言われようだ。傷つくなあ」

屋上の貯水タンクの裏からゾリシヨが出てくる

「まあ、掃除する塵が増えるのはいいことですビッチー！」

ピーヴィーが獣のように前屈姿勢でゾリシヨに駆けだす

「おおっとー！」

ピーヴィーの攻撃をゾリシヨが回避しピーヴィーに向けて右手の人差し指と親指を立てるいわゆる指鉄砲の構えだ

「バットヴォーダバロウダニェン！ 唯一無二の相棒！」

流暢なロシア語を魔法の呪文のように叫ぶとゾリシヨの右手に丁の拳銃が現れた

その銃の名前は“コルトM1911A1”通称ガバメント。アメリカをはじめとした世界各国で100年以上使用されてる息の長い自動拳銃だ

ゾリシヨは昇順をピーヴィーの足元に合わせて引き金を引く  
人気の失せた校舎に甲高い銃声が響いた

彼女は呪われた“木箱”その箱の中に格納された17個の銃火器  
装備品で戦うWW 《第三次世界大戦》時代の禍具だ

「銃火器の禍具！ビッチー！」

吐き捨てるように叫んだピーヴィーはガバメントから撃ちだされた45ACP弾を腕の装甲とも呼べる手甲で弾き一気に方向転換し  
フィアに襲い掛かる

ゾリシヨが人を殺せない……のを見越しての選択だ

ピーヴィーが腕を振るとあたった個所が砕けフェンスがひしゃげる

攻撃自体は単純な振りおろし、だがしかしその威力は一発一発が即死レベルの攻撃力を誇っていた

「どうして逃げてばかりなのですか？ファイア・イン・キューブ。話に聞く限りではあなたはそのような物ではないはずですが？」

「それ以上・・・いな・・・いな・・・」

その苦しそうなファイアを見てピーヴィーは合点がいったといわんばかりに顔に笑みを浮かべた

「もしやあの少年さんたちはあなたのことを知らないのですか？これはなんとビッチなんでしょう！では、ついでに先ほどの質問にお答えしましよっ」

「やめろおお!!」

ファイアの叫びも虚しくピーヴィーは上機嫌に話し出した

「今までに何をしたか？簡単です。大勢の人を殺したんです！男も女も子供も老人も貴族も貧民も黒人も白人も黄人も妊婦も赤子も罪がある人も無い人も！」

「あ・・・ああ・・・」

「すべてを神のごとく等しく残酷に、一方的に殺したんでしょ・・・？」

「ち、ちが・・・違う。違う！私は、私は、使われたただけだ！やりたかった、わけでは・・・」

「あらあら、いいわけですか物のくせに見苦しいビッチですね。けどやったという事実は変わりません、だからこそ貴女はこうして呪われている」

「黙れ・・・黙れ黙れ！」

「さて、最後の問いが残っていましたわね。どんなものか。これはもっと簡単です」

プツと吸ってた煙草を吐き捨てその目に蔑みを混ぜながら高々といった

「フィア・イン・キューブ。異端審問末期に開発された凡庸処刑器具ですわ」

「キサマアアアアアアア!!」

「どれほど喚き散らしたところで貴女には人化するほどの罰がある。物は物らしくさっさとガラクタになりやがれ、ビッチ」

ピーヴィーの両腕につけられた鉄塊が持ち上げられ放心状態のフィアに振り下ろされる

いくら人外の力をもったフィアとはいえどコンクリートを一撃で粉碎するピーヴィーの攻撃にかかればまさに一撃だろう

そのフィアとピーヴィーの間に割り込む一人の少女、村正こののがピーヴィーの頭上から手刀による奇襲をしかける

ピーヴィーの手甲とこののはの手刀が火花を散らしピーヴィーが距離を取る

「あらまあ、あらまあビッチな塵がもう一匹!こつもわらわら出てくると胸糞悪いを通り越して気持ち悪いですわビッチ!」

「そうですね、けど胸糞悪いのはあなただけじゃないんですよ!」

「じのはちやん同意!」

このはとごりシヨが各々の武器を掲げてピーヴィーに駆け寄った

ダァン！ダァン！ダァン！

ゾリシヨのガバメントの弾丸がピーヴィーの装甲に当たり火花を散らす

その隙をついてこのはがピーヴィーに肉薄する

「元気にとび出してきた割には貧弱ですね。そんな半端な力じゃかすり傷すら追わせられませんか？」

ピーヴィーの挑発に臆することなくこのはがピーヴィーの手甲と手刀を切り結んでく

「ばかもの・・・お前には関係ないことだ・・・引っ込んでおれ・・・」  
フィアが震えながらも精いっぱい虚勢をはる

「ええそうですね。けどあいにく私はあなたとは関係のないことでキレていますから」

「まあ、フィアちゃんはそこでこのんびりこの人が倒されるのを待っていないよー！」

ゾリシヨの渾身の蹴りがピーヴィーに命中しピーヴィーを吹き飛ばす

「あなたはどうするんですか？命を狙われてるのにずっとそうしてうずくまってるのですか？いくら呪いを解きたいとはいえそれくらい割り切らなくては生き残れませんよ？おとなしく破壊されてもよいのですか？」

このはがフィアに問いかけた

「嫌だ、そんなの・・・」

「自分の身がかかってても人を傷つけるのに躊躇してしまう、ですか・・・」

「なんだか昔の自分を見てみたいだね、このはさん」

「ゾリシヨが吹きガバメントの弾倉をポケットから取り出し交換する」

「二人とも悪い、混乱してて出遅れた」

「春亮くん！」

「おまえこそ逃げる！春亮！」

フィアの渾身の叫びに春亮は

「いやーなんだ、手伝いくらいはできるだろ」

「少年さん、わたくしも自ら人を殺すのはあまり気が進まなくてよ。もっとも廃棄物の掃除を邪魔するなら手加減はできませんがね！」

「そうにもいかない。これは日本人としての義理信条もあるしなにより、俺もこのは達と同じ理由でムカついているからだ」

「・・・あほー、なんでお前が・・・」

「そんなにアホかな？」

「知らぬは本人ばかりってやつだね」

「酷いな、そりゃ・・・悪いこのは、頼めるか？」

「わかりました、この姿だと手加減ができませんが、その辺はどうかご容赦を……」

「わかりました、壊した後には報告書を書かねばならないので今のうちに名前をつかっても……」

「俺の名前はジャック……というのは嘘、ほんとほゾリシヨ・ユアンでございます」

「……村正このは、けど苗字で呼ばれるのは嫌いです」

春亮がこのはの肩に手を置くと一瞬でこのはの姿が消え春亮の手には黒い鞘に納められた一振りの日本刀がさ残った

「いつものように楽にしてください……」

「おつわかった……」

春亮とこのはの間で短いやり取りがなされ鞘がついたまま《……》  
ピーヴィーに駆けだした

「あらまあ！あらまあ！それが日本のカタナというものなんですわ！わたくし初めて見ました……しかしなぜ鞘から刀身を出さないんですか？」

「諸事情により血が苦手なんです……けどご心配なく、当たるとものすごく痛いですよ……」

鉄鞘がピーヴィーの剛腕と何度かぶつかり合間を縫ってゾリシヨの銃弾がピーヴィーの装甲に放たれる

「だめだ！固い！これじゃあジリ貧だよ！チクシヨー！」  
ゾリシヨがうんざりした顔で空薬莖を蹴飛ばす



「このは、こつなつたらあれだあの、前にやった・・・『交叉法』嫌か  
もしれんがあれしかない」

「・・・一晩中こつするわけにもいきませんしかた・・・ありません  
ね」

「邪魔をしないでくださいまし！大戦時代の遺物が！」

ピーヴィーがゾリシヨを弾き飛ばしこちらに急接近してくる

どのような物にも弱点はある

ダイヤモンドが衝撃に弱いのと一緒でピーヴィーがつけている装  
甲で最も脆いのはどこか？

集中。集中し呼吸を整える

(まだまだ・・・まだまだ・・・)

焦らず、ゆっくりそれでいてなるべく正確にその答えを導き出す

( 今っ！ )

張り巡らした集中を一点に集め春亮の体を操り右手を力強く持ち  
手を握らせ左手で鞘をつかまい、抜刀

「剣殺交叉！」

常人には目視すら難しい速度の居合切りをかまし電光のような一  
瞬の煌めきはピーヴィーの装甲の一番脆い箇所を的確に破壊。それ  
らを一瞬のタイムラグの元破壊した

「……………ビッチ、ビッチビッチ。ほんの少し驚きましたよ。わたくしの肌を晒して凌辱していただけますとはね……………」

剣殺交叉は相手の武器のみ破壊する必殺剣でみごとピーヴィーの左の手甲が砕け散っていた

「な、なんだ……………それ」

春亮の震えた声の原因はピーヴィーの腕にあった

腕自体は普通だ。だがしかしその腕自体は歪に曲がり肌の色も壊死したような黒紫色をしていた

「なんだといわれても、ただの鉄の塊でコンクリートが壊れるほど殴ったら腕がこうなるのは、当然でしょう？」

「え、それって禍具とかじゃないの!？」

「誰があんな汚らわしい汚物に触れたいと思いますか！騎士領にはしかたなく禍具を使う者もおりますがわあくしはごめんです！それに……………痛みが大好きなんです。敵を叩き潰すのと同時に性的興奮も味わえるなんて……………素敵だと思いませんか？」

「く、狂ってる……………」

「ド変態め……………」

ピーヴィーが狂喜と恍惚に染まった顔でボロボロの自身の腕を眺める

「う・・・うえ・・・」

「このはっ！っかりしろこのはっ！」

呪いが解けかけてるこのはその性質が反転し今では血を見ると  
卒倒するのだ

ピーヴィーの腕はところどころから血が垂れ下がりそれがこのは  
の忌避感の原因だろう

「しかし若干バランスが悪いですね・・・まあ、構いませんが」

「やせるかぁー！」

ゾリシヨがガバメントを撃ちまくるがどれも決定打にかける

今のピーヴィーに傷をつけるのはすなわちギリギリのところにある  
このはの容体を悪化させる要因になりかねないからだ

そしてピーヴィーが接近し振るわれた鉄拳をどうにかかわした春  
亮だが

「まさか使うことになるとは・・・つまらない手ですけど」

ピーヴィーの手甲に仕込まれた刃が春亮の腕を貫いた

「春亮くんー！」

ゾリシヨが駆け寄り応急処置を施そうとするがピーヴィーがそれを許さない

春亮の悲鳴が響き渡る中フィアが感じたのは恐怖と

懐かしさだった

自分がいた廃城の領主たる男。狂気がみちる地下牢。それらがすべて鮮明に蘇り脳裏を駆け巡った

「あ、あああ・・・あああああ、あはははは・・・」  
その時の自分はまだ道具だった

だが人の感情をもって初めて理解した

「は、あはは・・・違う・・・はははは・・・笑うな・・・ははっあははは黙れ!・・・あははははそんなことはおもってくははははははははははは!!」  
二重人格のように現れる笑いを押さえつけ気を紛らわすためコンクリートを拳で殴る

ゾリシヨの銃声の合間に春亮の悲鳴が聞こえまさに戦場さながらだった

(春亮が殺される、けどあの姿になりたくない、やらなきゃみんな死ぬ、けどあれになるわけには、ゾリシヨももう限界だ・・・どうすれば・・・いい?)

その時ふと頭を何かがよぎった

「人化できるほどの禍具は人の姿でもある程度その性質を操れる……」  
そう、このはの手刀が刃物になったように、ゾリシヨの指鉄砲が拳銃になったようにファイアも自分と同じ四角形を媒介にやれるはずだ  
ポケットから転がり出たルービックキューブ、これな出来る。やり方もわかる

「……やらなくては、ならない……」  
少しだけ、ほんの少しだけ。春亮達を助ける間だけやろう

そこでファイアの理性にひびが入った

「そうだ、そうしよう……」  
まるで亡霊かなにかのように立ち上がるファイア

「泣くのはお止めになったのですか？今更いたいなにを？」

「なにをするかだって？決まってる

「これから、貴様の悲鳴を聞く。楽しみだ、あははは」  
歪に、狂気に染まった笑みをファイアが浮かべた

「偽装立方体（エミュレーション）、展開（スタート）」  
その瞬間突き出されたルービックキューブが変質し掌に収まる鋼鉄の箱に変わる

その箱から対角同士がくっついた無数の立方体が鎖のようにのびる

「二十六番機構・貫式閉鎖態【鋼鉄の処女】——禍動！」  
curse/calling  
呪文のように呟かれたその言葉は鋼鉄の箱を変形させ幾多の人々の命を踏みにじってきた拷問処刑具に変貌を遂げる

変形し終わったのは巨大な鉄の棺、  
アイアンメイデン  
鋼鉄の処女」

「さあ、鳴け。みじめに、豚のように——」

フィアが立方体を操作すると同時にアイアンメイデンが不自然な動きと共に動きピーヴィーを数百の鋼鉄の棘が生えた内部へいざなう

「でええりゃあああ!!」

ピーヴィーは逃げずにその場で残った右手の手甲を押し込む

ぎちぎち、と火花を散らす手甲と棘

甲高い音と共に鋼鉄の処女が弾かれピーヴィーはそのまま勢いよく駆けだす

「八番機構！碎式円環態！【フランク王国の車輪刑】

curse/calling  
禍動！」

今度は鋼鉄の処女がガシャガシャと組み合わせり出来上がったのは巨大な車輪だ

フィアが右腕を振ると車輪が躍動し車輪に取り付けられたピラミッド型のスパイクがピーヴィーの手甲とぶつかり合い再び火花を散らす

「ガッハ！・・・やっと、やる気になりましたか、ビッチ！」

ピーヴィーの挑発に答えずにファイアどこか虚ろな顔で車輪を引き寄せその形を変化させる

「十九番機構・抉式螺旋態【人体穿孔機】！」

c u r s e / c a l l i n g  
禍 動 ！」

新たに変形した形は凶悪なドリルだ

ドリルが恐ろしい音と共に回転を始めピーヴィーの胴体に突き出される

「ふふ、そうです。その顔です！人を傷つけるために作られた道具はどんな声で絶頂を迎えるのでしょうか！ビッチー！」

巨大な甲冑と凶悪なドリルがピーヴィーの頬をかすめファイアを粉砕するべくピーヴィーの剛腕が振るわれた

「悲鳴を上げさせる方法は私とお前とでは数百年もの差がある。鳴け」

ファイアが立方体を操作する

「三番機構・断式落下態——ギロチン！」

長年の直観がピーヴィーを自然と体を引かせる、が無理な体制だったのでピーヴィーの剥き出しの左手が切り落とされる

「ぐわああああああ!!!」

ピーヴィーの口から悲鳴がほとばしった





そこまでして禍具破壊に暗い執念を燃やすピーヴィーは遙かに人間離れしていた

「ほお、まだ立ち上がるとは。その執念と根性は称賛に値するなあ……」

そういつつフィアのルービックキューブは立方体が鎖状になった立法鎖を巻き取り五番機構・刺式佇立態【ヴラド・ツェペシュの杭】を実体化させる

「貴様は頑張った方だ。あの世で誇るといい！」

幾多の人体を抉った処刑杭が放たれ空気を荒々しく削る

「だめえええー！」

ゾリシヨが叫び杭に銃弾を当てるが甲高い音と共に虚しく火花を散らす

「フィアあああああー！」

春亮の叫びも虚しくピーヴィーに杭飛んでゆく

その時、ピーヴィーピーヴィーの胴体に白い『線』が巻きついた

その白い何かは目にも止まらぬ速さでピーヴィーを巻き取るとそのまま屋上から連れ去った

決る目標を失った杭が屋上を再び破壊する

「……なんだ、あれ？」

「さあ？待機していた仲間とか？」

ゾリシヨが拳銃を消し春亮に駆け寄る

「八番機構・碎式円環態【フランク王国の車輪刑】！」

フィアが唐突に拷問車輪を投擲した

「バットウーダバロオーダーニエンー【犠<sup>F</sup>牲者<sup>S</sup>の盾<sup>B</sup>】ー！」

ゾリシヨの手に現れたのはライオットシールドだ

拷問車輪と7・62mm弾すら弾く防弾盾が擦れあいゾリシヨが  
車輪を横にそらす

「フィア！なにしてるんだ!？」

春亮が驚いている

そりゃそうだ。味方のフィアに攻撃されたのから

「……足りない……血が足りない！悲鳴が聞きたい！流血が見た  
い！」

フィアが拷問車輪を再び投擲。今度もゾリシヨがそらすも勢いに  
負けて尻餅をつく

「鳴けえ！悲鳴をあげろ！」

身を守る術を失ったゾリシヨに車輪が肉薄する

『なにをやってるんですか！』

そこへ意識を取り戻したこのはが春亮の体を操りフィアの攻撃を  
そらし鞘でフィアの体を打つ

「があー！」

屋上をゴロゴロと転がるフィア

「ゾリシヨ、無事か!？」

「大丈夫」

首を回しながらゾリシヨが立ち上がる

「フィア……どうしちまったんだお前……」

ポツポツと雨が降り始める。台風が近い証拠である

「……は、はは……雨、これも初めてだ……こんなにも、冷たいものなんだな……なにもかも、ずぶ濡れではないか……」

フィアは寝転がったまま自嘲じみた口調でしゃべった

「春亮、わかっただろう。これが私の本性、これが私の正体だ。私は結局、どうしようもなく狂っているだけの存在なのだ……人の概念を持って……初めて、罪に気付いた」

「……よくあることだよ」

例えるなら相手の足を踏んでからそのことに気付くようなもの

しかし、まだ人生経験の薄いフィアにそのことは理解できない

「よくある？ 本当にか？ 春亮、私の呪いを知っているか？ 私の呪いもありふれたよくあるものだ《所有者を狂わせる》どんな聡い人間だろうと心を狂わせ快樂のために他人を拷問せざるを得ないようにする……こんな私が罪深くなくてなんなんだ？」

「フィア、俺にはそんな呪い効かないから！ 体質だからこれからも大

「丈夫だ！」

「私には、人を殺した、罪がある……人を殺し過ぎた罪がある……」

「なんの話だ、ファイア？」

「な、春亮……私は、私は

赦されて、いいのか？」

今まで知らなかった罪の重さに苦しみ罪の重さに潰されそうなファイアの震えた声での問いだった

「帰るっ、」は寒すぎる

答える意味のない質問と断じてあえて答えなかった  
なにも答えず、ファイアに居場所を提供したのだ

「フツ、優しい……優しい答えだ。優しくて、最低だ」  
その一言を残し身軽に屋上から飛び降りた

「ファイア！待て！ファイア!!」

春亮の伸ばした手は、届かなかった

「さて、また血が出てきやがったね春亮くん」

ゾリシヨがピーヴィーに斬られた箇所をみて呟く

「こののが急所を外してくれたんだろ、ありがとう、このは

「礼には及びませんが、心配ですし病院に行きましょう」

日本刀からこののが元の体に戻り提案する

「そうだね、感染症とか怖いし」

「このはの意見にゾリシヨも賛同する

しかし春亮は無言だった

「……行く気はないと？」

「だったらどうする？」

「怒りますよ」

「……既成事実を」

「ゾリシヨ！お前は何言ってるの!？」

「そ、そうですよ！ゾリシヨさん！ふざけないでください！」

「このはが真っ赤な顔でいう

「春亮くん、あの子が自分の意思で立ち去ったのんですからなにがあっても自己責任です、違いますか？それにあの片腕の人もあきらめ

た感じではないから今逃げるのは正しい判断です」

「ッ！・・・そうだけど、けどあいつ・・・」一人で眠ったほうがいいって『いつてた』」

「え？」

「逃げたんじゃない。もっとたちの悪い終わり方をしようとしてるんだ」

春亮は視界の隅で屋上から立ち去るゾリシヨの姿を認める

複数の禍具をもつ仲間同士、繋がるなにかがあったのだろうか？

「それでも・・・」

「頼むよ、この姉一生のお願い」

春亮の奥の手が発動した

「・・・卑怯です、その呼び方は」

「「」つでもしないと、勝てそうにないし、それにぶつぶつ文句言いながらも最後には・・・いつも助けてくれた」

「ふん、知りませんよ」

拗ねたように後ろを向いてしまつたのは、しかしその顔はにやけていた

「あー・・・実は、俺困ってるんだ」

「な、なんですかやっぱり痛みますか!？」

「あ・・・その・・・服・・・」

「服？」

「そろそろ・・・服着て・・・」

「早く言ってくっださいいいいい!!」

「このはが半泣きになりながら制服を取りに行く人としての意思を持つ禍具は本来の形になると服は脱げた状態になるのだ

「この姉！新しい制服だよーおりゃあー!」

ゾリシヨが保健室から持ってきた制服をこのはがキャッチ、ピットインするF1のような感じで着替える

「フィアちゃんは、当たり前のことがわかってないだけだよ」

ゾリシヨがなにやらノートパソコンみたいな機材を取り出しながら呟いた

「当たり前？」

「そう、わたしも昔おんなじことしなかった？」

「ああ・・・」

まだ春亮が中学生だった頃の話だ

お祭りの出店のおもちの拳銃がゾリシヨの手により実銃に変貌し暴発、このはがいたので大事にはならなかったがゾリシヨは責任を感じて自殺しようとした事件だ

「だから、その時とおなじ考えでいいんだよー」

「同じ・・・考え・・・」

「私は【ザミエル<sup>プロ</sup>の鷹<sup>ター</sup>】で空からフィアちゃんを探す。春亮くんはこのはちゃんと思いででも作ってきな」

「……そつだな、どしゃ降りの中を走るなんて、若いころにしかできなからな。このはも一緒にどつだ？」

「……はぁー、思い出づくりなら、仕方ありませんね」  
苦笑いしつつもこのはと春亮は走り出した

## とある廃工場

薄気味悪い工場の中を一人の少女が駆けてる

背中には左腕が欠けた女性、ピーヴィー・バロライを背負って

素人目に見ても重傷のピーヴィーを毛布の上に横たえると羽織ったマントから何かが伸びる

「……チュバカフラパンティ【怪物繃帯】」

ひとりで伸び始めた包帯がピーヴィーの左肩に巻きつく

「う、ぐあぁぁーがあぁー！」

ピーヴィーが悲鳴を上げると体が魚のようにびくんとはねる

じゅるじゅると何かを嚙るような音が部屋に不気味に響く

「うあ……な、なにを……」

想像を絶する痛みと共にピーヴィーの意識が覚醒する



「……もう満腹。のほほ。」

飛びかかるうとしたピーヴィーはあれほど痛んだ肩が痛まないのだ

【怪物繃帯】はいかなる傷をも治療する。が最初に巻いた瞬間から激痛と共にこれは血を吸う。死に至る傷を防ぐために死に至る痛みを強いる。これがこの禍具の……呪い」

「<sup>オーゲジラリ</sup>後方支援員……」

「その状態ではホテルに運べなかった。故に隠れ家の一つであるここで処置した。説明が遅れたのを、謝罪する」  
マントでかくれた顔をピクリとも動かさず淡々と事務的な説明をする

「……まあ、人材不足の騎士領ではしかたありませんね……あなた、名前は？」

「ん、<sup>マミーメーカー</sup>【ミイラ屋】とでも」

「ふふふ……そうですね、ちなみに嫌いなものはわかりますか？」  
するとマミーメーカーは手帳を取り出しページをめくってく

「嫌いな物は禍具全般、特に……」

「細長い紐状の禍具は吐き気がするほど嫌いです」  
ピーヴィーはそこでマミーメーカーの包帯を覗む

「……【怪物繃帯】の使用を、否定されてる？」

「そうではありません、この傷を治すためにやむなく。まあ、そこは讓歩しましょう、けど問題は、今」

「今？」

「それ、脱ぎなさい」

ピーヴィーが指さしたのはマミーメーカーのマント

「私は醜い。酷い火傷があつて・・・」

「関係ありません。わたくしが見てない場所ならいざ知らず、目の前だと我慢なりません」

「・・・必要とあらば」

マミーメーカーがフードを取る。すると包帯が自動でスルスルとほどけ近くの廃材の裏に収納されていく

マミーメーカーの体は本人の言った通りうねるような火傷があり処置はされてるものその場所は黒ずんでる

「・・・醜いですって？充分きれいですわよ」

そんなマミーメーカーをピーヴィーは優しく頭を撫でた

「はっ・・・」

するとマミーメーカーは顔を赤くしてうつむいてしまった

(あまり人と接したことがないのでしょうか・・・まあ、そこはそっとしときましよう)

騎士領の後方支援員や騎士は禍具に関わってしまった孤児や一般人で構成されており内々の事情を邪推するのは暗黙のタブーとされていた

「さて、わたくしは少し休みます。何かあったら起こしてください」  
そういってピーヴィーは眠りについた

雨が冷たく降り注ぐ街中、上野錐霞が路地ですぶ濡れのフィアを偶然見つけた

「フィアくん？どうした、こんなところでずぶ濡れになって。夜知はどうしたー緒じゃないのか？」

錐霞が傘を射しながらフィアに近づく

「……寄るな」

暗く、掠れた声で呟いた

「……そうは言っても。雨の降る中夜道にびしょ濡れの知り合いを放置するのは目覚めが悪い。よければ相談にのるぞ？」

「来るなッー」

その瞬間錐霞の傘を無機質な鋼鉄のドリルが貫いた

「フィ、フィアくん……それは……一体？」

愛らしい少女には似つかない巨大なドリル。その巨大さはまさに重機のような

「ははっ……また私は、傷つけるのか。こんな、簡単に……」

フィアは絶望しきった乾いた笑いをあげる

するとドリルが一瞬でルービックキューブに変化し錐霞をまた驚かせる

「頼む。ほっといてくれ……」

憔悴しきった顔でフィアはふらふらと夜闇に消えて行った

「いたか？」

「ぜんぜん見当たりません・・・」

「このはと春亮がそろって溜息をつく

バスや電車には乗れない（おそらく乗り方を知らない）からそう遠くには行けないはずだしゾリシヨの空からの搜索もあまり身を結んで無い様だ

「どっくにいったんだよ・・・」

と、そのときポケットの携帯が鳴った。相手はクラスメイトの上野 錐霞だ

「委員長さん!?悪い今ちよっといそがし」

《フィアくんを見た》

おもわず行動が全て止まった

「ホント?」

《ああ、その・・・なんとも、ばかげたことなんだ・・・見間違いではないと思ったが、実に非科学的で・・・》  
ずいぶん動揺しているようだ

「どっしたんだいーんちよっさん！まさかフィアがなにかしたのか!？」

春亮の脳裏には先ほどの戦闘がよぎった

まさかフィアがどこかで暴れてるのか？

《いや、その・・・ルービックキューブがドリルに変形したんだ》

「ドリル・・・」

春亮の脳裏には屋上でみた【人体穿孔機】が思い浮かぶ

「春晃くん、フィアさんの情報かなにかは？」

「このはが聞いてくる

「いーんちょうさん、今はちょっと事情で話せないんだ。フィアがなにか言っただけだったか？」

《ほっとしてくれとしか・・・》

「そうか・・・ありがとう」

《うむ、こちらこそすまない、大したことを言えなくて・・・》

「いいんだ」

携帯を閉じる

「結局、わからずじまいか・・・」

「うづなったら、もう一度探すしかありませんね」

「このはが疲れたように溜息をつく

その時春晃の携帯が震える。着信相手は、ゾリシヨ

《ファイアちゃんが見つかったよ》

「これが海か・・・」

フィアが台風で荒れ始めた海を見る

風が轟々と吹き荒れフィアに容赦なく冷たい雨粒をぶつける

「テレビで見たものより、暗いのだな・・・」

フィアがそういう。だがフィアはこれが台風によるものとは知らない

「だが・・・私の、最後にはうつてつげだな・・・」

そうフィアが呟く

一歩また一歩とフィアは海岸に歩み寄っていく

その足取りは重く、まさに亡霊のようだ

「・・・イアー!!」

「えっ?」

自分の名前を呼ばれた気がした。あのどうしようもなく能天気な少年に

「・・・ふ、ははは!私も未練がましいな」

自虐じみた笑いを浮かべフィアはまた歩き出した



「くそッ！本当に「」なのか!?!」

春亮が雨に濡れながら海岸に続く道を走る

「ゾリシヨさんは「」だって言っていましたけど・・・」  
「のはもばやきながら走る

ちなみにゾリシヨは《ザミエルの鷹》の代償でしばらく全身が金縛り  
りで動けないため捜索に参加してない

「フィアーーーー！どこだぁーーーー!!」

「フィアキーン!!」

「このはと春亮が雨に濡れながら叫ぶ

しかし探し人は一向に答えたりはしない

「どこに「」にいるんだよフィア・・・」

荒れ始めた海を見てばやく春亮が目にしたのは

「・・・あ

波打ち際に漂う一個の立方体、ルービックキューブ

「・・・はははは、そっか。そっか。そっか。そっか・・・」

なんとも疲れた笑みを浮かべた春亮はポケットから財布や携帯を取り出す

「・・・春晃くん？」

「この話が不思議そうに春晃をみる

「あいつは二つ、見落としていた。一つはバカだったこと。とりあえず人気が無けりやなんでもよかったんだな、けど海でよかったよ。そして二つ目」

春亮は大きく深呼吸し軽く体をほぐす

「俺のあきらめの悪さをなめるな！」

そのまま、海に、飛び込んだ

「ブッハ！」

「春晃くんー！」

フィアを掴んで浮かび上がった春亮をこの手が掴んで陸に引き上げる

「生きてるか？」

「さあ？けど、私達はこの程度では死にませんし、きっと生きてますよ」

「このはが投げやりに言う」

「ああ………そういや、おまえ等がそう《・・》なの。すっかり忘れてた………」

禍具は並大抵のことでは壊れない。それこそ粉々に砕いたりしない  
いと壊れたりはしないのだ

「まったく………そう………またいいんですが………」

「このは、何かいったか？」

「いいえ、なにも」

「このははとつをにじりまかし歩き出した」

「まったく、心配かけやがって………」

背中であらかな寝息をたてるフィアをみてため息をつく春亮だった

「あ、ああー………痺れる」

《ザミエルの鷹》の効果が薄れてきたゾリシヨは身体の痺れを解す

「やれやれ、参ったな……」

ノートパソコンのような機器を仕舞い、縁側に目を向ける

そこには養虫のように逆さにぶら下がる一人の少女

蒐集戦線騎士領の後方支援員の《ミイラ屋》がゾリシヨを冷たい無表情で見ていた

「あんだ、名前は？」

ゾリシヨがぶら下がった少女に聞く

「私は、《ミイラ屋》<sup>マミーメーカー</sup> 蒐集戦線騎士領の<sup>オーグ</sup>後方支援員」

《ミイラ屋》は表情を変えずにそう呟いた

「そうか、で。なにしに聞こへ？」

「提案にきた」

「はあ？」

「我々の目的は《箱型の恐禍》<sup>ファイア・イン・キューブ</sup>の破壊。そのみが至上命令。よって《箱型の恐禍》を、そちらが破壊するか、無力化し引き渡す、もしくは《箱型の恐禍》の破壊を邪魔しない、のどれかを選べば、他の日本刀や銃火器や夜知家の人員には危害を加えないことを、約束する」

淡々と、逆さづりですうのべる少女

「ふうーん、何でそんなこと言い出すの？」

「この提案はいささか突発的で胡散臭い」

「……先の戦いで騎士の一人が負傷、した。これ以上の損失は、避けた  
い」

「へえー……」

向こうはそんなに大勢居るわけではないと

「ねえ、なんで今更そんな交渉に来たの？」

確かに、戦ってから「休戦しましよ」「は順番がおかしい

」……これは、私の個人的な申し出。でも、約束は、守る」

そういうと《ミイラ屋》は袖から飛び出た白い布か何かをスパイ  
ダーマンのように木に巻きつけあつたという間にどこかへと消えた

「……フム、なんだったんだろ？」

「と、いうことがあつたんだよ」

「なるほど……確かに妙な提案だな」

ずぶ濡れになり、オマケに霧霞さんも付いてきたのでちょっとした  
騒動もあったが今は全員が身体を拭い、仲良くカレーを食べていた

「敵の畏の可能性もありますから、行動は慎重にしたほうがよろしい  
ですよ」

「こののは言つとおりですよ。話に乗ってフィアちゃんを渡してもあのバロライとかいうイノシシ女が止まるとも思えないし」

ゾリシヨは深夜アニメを観ながら呟く

「そうだな。とりあえずその交渉は放置して向こう側を急襲できた方がいいな」

春亮が残念そうに呟く

バロライとかいう戦闘員が重傷を負っており、向こうは今戦力が無いときだ。ここですさらに追撃を食らわしたら撤退は確実だろう

「場所がわかればなあ……………」

「ですよね……………」

この街も小さくはない。そこから二人の人間を探すのはかなり難しい

「《ザミエルの鷹》を街中で使うのは危険だしなあ……………」

うっかりロングヘルファイヤが街中に落ちたりしたら大変だ

「そうなると地道に探すより待ってた方がいいな」

霧霞が呟く

「ちなみに夜知、その者達が攻めて来たらどうするのだ？法に接するよじなことをするといつなら……………」

霧霞がじつとりとした目で見てくる

「いや、そんなことしないよ、装備を破壊するか来る気が無くなるまでシバキ倒すくらいかな」

事実、それくらいしか出来ないのだ

「わざわざ戦力分散させてさがすより戦力集めて一カ所で護る方が楽

だしね、夜はあたしとこのはちゃんで護っとくよ

深夜アニメを見終わったゾリシヨが立ち上がる

金色のアホ毛を弄りながら狙撃銃を担ぎ上げる

夜はますます深まってきた

廃工場

プルルプルルプルルル……

「ぶっぶっぶー……」

ピーヴィーが鬱陶しそうに目を開け枕元の携帯を持ち上げ耳に当てる

「……hello?」

《一等殲滅騎士、ピーヴィー・バロライか?》

「……領主様!?!」

一瞬で眠気を吹き飛ばし声を正す



「申し訳ありません！」

《よい、いきなりかけたのは私だ。それより、お前に伝えることがある》

そのとき、ピーヴィーは眉をひそめた

領主様が直々に伝えることとは何だろうか？それほど重要なのか？

《後方支援員から話を聞いて事前情報に無い禍具があったそうだな》

「え、ええ、まあ……」

《最近騎士の殉職が相次いでいる。そのため、お主の元に増援を送ることにした》

「ぞ、増援……？」

《ああ、『旅に疲れた者』を送った。二人で確実にしとめるのだ。期待しているぞ》

「は、はい！わかりました！領主様！」

そして電話が切れニヤリとピーヴィーが笑う

領主直々の激励だ。失敗するわけにはいかない

余所からやってくる人員は正直アレだが領主様の優しさでも思っておこう

「しかし、『旅に疲れた者』か……」

奴は厄介な体質持ちだ。上手く戦えればいいが……

## 東京湾

一隻の貨物船が港に着岸する

「……………」

くたびれたように呟く一人の青年

首につくかつかないくらいの長さの黒髪に青い眼、そしてくたびれたロシア空軍の軍服

彼こそ蒐集戦線騎士領の切り札のうちの一つである  
【スベシャルナイツ選抜特殊騎士】である

【選抜特殊騎士】とは禍具を使わずともその身に宿した特異能力や限界まで高められた身体能力や武技などを扱う一般の騎士とはまた毛

色が違う騎士である

「住所は……遠いなあ……」

だるそつに呟き歩き始めた

近くに空港もあるのにわざわざタクシーを使いピーヴィーの潜伏する廃工場に向かった

結局、あの後は敵が攻めてきたら基本的に徹底的にしばき倒して追  
い返すことに落ち着いた

霧霞ちゃんは帰った。もし攻められたら大変だしね  
そのためしばらく交代で見張りをつけることにした

ところで、銃火器の音はうるさい

ゾリシヨが使う禍具も例外なく音をまき散らす

そして、ここに一個の禍具がある。その名前は  
《<sup>ジャック</sup>聞こえないが<sup>ポット</sup>見えはする》というサブレッサーである

このサブレッサーの効果は銃声を消す、といったものだ

おまけにどんな銃火器にも取り付けれるすぐれものだ

そんなサブレッサーを巻いたM240軽機関銃《理想社会への犠  
牲》という名の銃で、ザカエフ国際空港で起きたテロで使用された銃  
の内の一丁である

屋根に登り、機関銃の二脚<sup>ハイポット</sup>を立て、上から辺りを見渡す

表は大丈夫と思い、あくびを一つし、機関銃の照準を調節する

その瞬間

「じっ……ぐあぁあぁあぁ……」

急に痛み出した左胸を抑える

まるで、いきなり焼け火鉢を突っ込まれたような熱さだった

『殺せ、ロシア人だ』

「ッ!!？」

その瞬間、ゾリシヨは空港にいた

幾人もの人々が通り過ぎる中、誰もゾリシヨには気付かない。どころかゾリシヨはそこにいないように感じられた

そこへ巻き起こる殺害の嵐

三丁の機関銃と二丁のライフルとショットガンが乱射され、ところ構わず弾痕を開け、人々の命を例外なく刈り取っていく

『Uraaaaaaaaaaaaa!!!』

男達が叫びながら重火器で人々を薙ぎ倒していき、警官の持つ拳銃では歯がたたない

『やめてッ！撃たないで!!』

男達を止めようにも機関銃による蹂躪は止まらない

『あ、ああ……………』

怖くなった。こんなことをしている人が

そして自分の一部がそのことに加担していると考えるとたまらなく恐ろしかった

男たちは金属探知機をビービ 鳴らしながらホールへ向かう

チーン

振り向くと胸から血を流した男がフラフラと歩き、やがて倒れた

『大丈夫ですか!?!』

ゾリシヨが駆け寄ると男は

『マ、マカロフ……………』

血混じりの咳をしながら男は落ちていた拳銃を拾い上げる

薄れゆく意識の中、彼は拳銃を撃つ。マカロフただ一人を殺すために

しかし、装填されている9mm弾はかすりもしない

『くそッ……………クソオ……………』

やがて男は弾切れの拳銃を落とし、そこで倒れた

ガシャ　　ン!!

その音で現実に戻ったゾリシヨは機関銃を持ち上げる

下を見るとロープを羽織り、黒くて細長い何かを伸ばしてさながら探検家のように逃げ出す不審者がいた

「逃げすかッ!!」

サブレッサーに減音された機関銃が遠慮なしに撃たれ、逃げ出す不審者の周囲を機銃弾が決るが命中弾は無い

やがて姿が見えなくなり、ゾリシヨも銃を撃つのを止める

7・62mm弾の空薬莖が屋根を転がる音が響く

「……………」

撃った銃弾のうち当たったのは2、3発しかし、向こうはぴんぴん

していた

ゾリシヨの脳裏にはカードを届けに来た少女、《ミイラ屋》の姿を思い浮かべる

(あの子にしちゃ、やけにタフだな……)



「春亮くん、怪我はない？」

ゾリシヨが軽機関銃を脇に置き、春亮にすり寄る

「ない、ないから！その手は何だ!？」

「念の為調べないとね！大丈夫！痛くしないから！諦めて服を脱げッ  
！」

手をわきわきと蠢かしながら春亮に詰め寄るゾリシヨ

「脱ぐかッ!」

そんなゾリシヨと春亮のやりとりもこののはの介入により終わる

「敵は取りあえずは撃退？出来ましたね」

「」のはが肩を回しながら呟く

「しかし、まさか日付が変わった瞬間に襲ってくるとはな……」

「ごめん、春亮くん。ちょっとボーツとしてたらこのぞまでした」

「ゾリシヨさんが見落としたのも仕方ありません。殺気という殺気が  
ありませんでしたから、私の責任です」

「」のはが申しわけなさそうに謝る

「敵はどっからきたのかな？」

ゾリシヨが呟くように「」のはに聞く

「……わかりません。でも次は猫が来てわかるぐらいにします  
ね」

「ああ、わかった……」

春亮があくびをかみ殺す。寝てたところを叩き起こされたのだ、眠いだろう

「……では、配置を変えましょう。ゾリシヨさんは表、私は再び裏を見張りますね」

「異論なし！」

機関銃を抱え、立ち上がるゾリシヨ

夜はふけていった

「うむう……どうしたものか」

ゾリシヨは先程から左胸を撫でていた

原因は先程の激痛。今はすっかり治まっているが未だ原因はわからなかった

(……そういえば左胸には切り傷があったな……)

ゾリシヨは第三次世界大戦の武器が詰まった箱の禍具。であり、大戦中につけた傷は計り知れない

その中でも左胸、丁度心臓の位置にある切り傷はどこで受けたのか記憶が無いのだ

「なんだろうかな？心不全!?ヤダー！」

両肩を抱いて軽くふざけていると

「んなわけねーだろ」

「っ!？」

《理想社会の犠牲》を消し、取り回しの効く《唯一無二の相棒》を抜き放つ

「エントレスフォーレンゲ《幽霊の目》」

何かが光り、ゾリシヨは反射的に目を覆った

「……なんだ、JJJJ?」

ゾリシヨが目を開けるとそこは海の上の石油リグだった

そして戸惑うゾリシヨの前には男が一人いた

くたびれたロシア空軍の制服に肩には傷だらけのAK 47、目には血がついたサングラスをかけている

「俺の名は……まあ、ニコライ・ウオーカーとでも呼んでくれ、【蒐集戦線騎士領】所属、まあ、なんだ。【箱型の恐禍】を潰しにきた……ダルウ……」

男は首をコキコキ鳴らしながらAKを持ち上げる

「……」

「……まあ、どこでもいいだろ。強いていうならこのサングラスの持ち主が生前見ていた風景のどっかだ」

サングラスを中指でズラし、こちらを見てくるニコライ

「新手か……目的は？」

「さっきも言ったろ？お前らフィアと呼ぶ物を、破壊する」

「だとしたら、なぜ私をこんなところに？」

「……各個撃破ってやつだ、よー」

ニコライが脈絡もなくAKを乱射した

7・92mm弾がゾリシヨに襲い掛かる

「バットウオーダンバローダニエンー！【犠牲者の盾】！」

強化プラスチックのライオットシールドが銃弾を弾き、ゾリシヨがその距離を詰める

「それでも、食らえー！」

AKの銃身に取り付けられたグレネードランチャーが発射される

「ヤバッ！」

【犠牲者の盾】は後ろから攻撃を食らうと重症なのですぐさま解除して【唯一無二の相棒】を撃ちながら逃げる

「へえー、いい動きするじゃないか」

ニコライが手榴弾を腰から取り出し投げる

放物線を描いていた手榴弾は突如、動きをとめゾリシヨの真ん前に落ちてきた

「なんでだあ!？」

物理法則を無視した手榴弾の動きに驚き、素早く手近なコンテナに隠れ爆風から身を守る

「ハアッハアッハアッ！スペシャルナイツをなめるなよ！」

ニコライの笑い声が響いた